

秩序と安定をめざす学級経営

——解放と訓練による変容を期待して——

陶 山 玲 子*

生活態度の荒れた学級を受け持って、秩序と安定を求めた。欲求充足のため大いに遊ばせながら他方でけじめをつける訓練をし、音楽鑑賞で子どもの吐露する気持ちによりそう。友人関係で相互排斥の者同志の合奏をさせたら、美しい音をつくる目的にこだわりが置きかえられて関係改善へのきざしを見る。これらの手段の根底としたのは原因追究ではなく“子どもの変容”を信じて接する教師の態度で、これにより“訓練”も“解放”も矛盾せず事態は好転している。

I 子どもの実態と対策

新年度担任した学級(4年生 男子18人 女子19人)は、生活指導上問題が少ないといわれた当校で近年まれな子どもたちということであった。座席につかず人の学用品をとったりひとをたたきS、かん高い声でわめき続けるR、休み時間もじっと机を離れず、いたずらされてもほとんど口を開かず放課を待ちわびて帰るN、他の子どももSやRと呼応してどなりさわぐ者、われ関せずと内職する者、…等々作業もはかどらずきまりは守れない。鐘がなっても呼ばれるまで集まらない。というように学習はもちろん、学習以前の問題が多かった。

周囲の人の話では、私をなめて言う事をききません(前任者)。そのうちわかるでしょう、言わないでおきます、あなたのよいようにやってみてください、困った時はしかることくらい手伝います(同僚)。きびしくしてよくしてください。悪い子には厳罰で願います(父兄たち)。ということであった。

子ども自身の意識は低く、「どんなクラスにしたいか。」には1~2の者しか答えなかった。

「先生にやってほしいこと」では、いっしょに遊んで(2)・悪い子をしかって(2)・きびしくして(1)・体育を多くして(1)・並び方をかえて(1)・宿題を出して(1)・わからない、ない(25) 無答(4)

その他……父兄は協力と非難が半々、Sらに言われて金銭を持ち出した事件、RやSらが家から金を持ち出し町で浪費、担任の病気等により学校長、教頭、教務主任等交代で担当した期間が約40日

○矢田部ギルフォード性格検査(Y. G. T)の結果(5月)

A類(平凡型) 11名, B類(不安定積極型) 4名, C類(安定消極型) 5名,

D類(安定積極型) 9名, E類(不安定消極型) 8名

○ソシオマトリックスによる考察(4月末)

下位集団は最大女6人~最小男3人の7集団あり、周辺児3、孤立児2で特にNの被排斥数が29と

* 新潟市立関屋小学校教諭

多くなっており疎外されている。

- ・学級全体としてみると，C R S（選択排斥総合）総計が－9となり，反発傾向がわかる。
- ・男女間の選択が全くない。女子に排斥される男子が多く，好ましくない集団の状況である。

これらを総合して，当クラスでは 男女，集団等を含む全児対象の指導とともに孤立のN（男）粗暴等のS（男）乱暴興奮等のR（男）の3人（表1）への個別指導等市広く，かつ長期的な指導が必要である。

（表1） 資料

児童	健康面	知能偏差値	Y-G	家族構成	主な問題行動
N	てんかん	教研式 28	A型	祖父母，父母，兄の6人	孤立，消極，欠席30
S	健	" 32	A	母離別，父別居，祖父母，姉4人	反抗，乱暴
R	健	" 79	D'	父外国出張，母，兄，弟の4人	興奮，顕示性，反抗

II 指導と結果

1 あそぼう会

子どもたちがガラス，花びんなど物を次々にこわすことから，内部から爆発するエネルギーを感じて今何をしたいのかと問うてみた（4月末）。男子は，自転車をのりまわす，泳ぐ，木のぼり，パラシュートで飛行機からとびおりたいなどで，女子も泳ぎ，ボール遊び，自転車などと答え，男女とも活動的なことを望み，工作，絵をかく，料理など静的な答えはわずかであった。校舎増築のためグラウンドで遊べず，せまい体育館では活動的遊戯は制限される。けいこごとが平均1週3時間40分もある地域だから帰宅後に期待はできない。思い切り遊ぶ時間と場所を与える必要を感じ，学活時間を校時の最後にして2時間延長できるようにした。週2回の遊んで帰ることをすすめる，諸会合のない時は担任も遊んだ。グラウンドに代わる遊び場は海浜公園，屋上を使った。学級用の運動具も補充した。

3人のうちSとRはよく遊んだが，Nはまず教師が連れ出した。最初，彼は全く傍観的だったが，間もなくなれて教師と遊び，彼を仲間に誘う子が出るようになると教師の仲介は不要となった。3週目からNは自分から休み時間に遊びに出るようになり，表情もことばも生き生きしてきた。こわれ物がめだって少なくなった。梅雨にはいると，教室の床での卓球を教師がいる時許した。子どもたちは床ピンと命名した。また楽しみ会を行ない，グループ毎に劇や紙芝居をやった。Nがダンブカーの役をやって拍手を受けた。

2 けじめをつける

遊ばせて解放する一方，秩序ある生活への訓練としてきまりをよくする目標をきめた。実はこれに先立つ4月当初も，鐘が鳴ったら着席，時間中は立たないなど，きわめて低次のめあてで一応成功したかに見えたのだが，すぐ元に戻ってしまう。なぜこうなるのか，訓練ということは押しつけて子どもを規制してしまうことであってよいのか，習慣づかなければならない“チャンス”を過去に失ったためか，などあれこれと考えしばらく低迷状態からぬけ出られなかった。「どうしてできないの。」

など子どもに愚問を発してみることがあった。後の項でのべるが、実は、教師がこの迷いであって“なぜ？”ばかり考えていたことが子どもらを“困ったくせだ”という固定的な枠にはめてい（表2）

たと考える。生活訓練も解放も矛盾なく行なえるようになったが、4月以来自発効果をねらって与えたがんばり表（表2）は、次第に、形式的に○×を入れているようすなので2か月で中止し、説明して“自由日記”に切り替えた。毎日見てはげましや共感などを書いてやるため張り合いを持って書く。表現形式ではもちろん観察でも見いだせない子どもの意識の一面を見ることができ、労は多いが有意義である。時間のきまり、給食の約束などどうあるのがよいか子どもに言わせ、めあてをきめて反省した。

がんばり表	
日	めあて
1日	○××
2日	×○×

体育では時数確保と運動量を多く留意したのは前項1の方針からで、集合競争や後始末、協力の度合いで評価する時も、良い面や向上した点を探すとか、やりなおしによる意識化などはけじめの訓練だった。

叱ることはほめるほど効果がないことは定説である。だが、特別の場合には叱ることもまたやむを得なかった。強いしっ（叱）責は一瞬、緊張感を与えたようだが……。

3 よりそう音楽

おちつきがなくあたり散らすRが、一生懸命立て笛を吹きオルガンをひく。乱暴なSも、太鼓を打つのが好きで力強いリズムを打つ。ひとと合わせながら自分も楽しめる音楽を、技術指導に終わらせないで、よりそうことに中心を置いていけないものか。統合の中でまたひとり生かす事に努力したい。

山松質文氏の著“音楽における心理療法”によればアルトシェーラー博士は“音楽が怒りの感情を平和な満足感とおきかえる力、情緒をコントロールし行動を正常化するカタルシスの効果をもつ事”に注目し同じくブファイファー博士も“音楽は一体感や所属感を与え、人をあたたかい友好関係で結びつける”と述べ、異常者治療の実例や有効な曲名などをあげている。普通学級では専門機関が行なうような治療は困難であるとしても、こうした心を心しての音楽指導をすることは可能である。音楽は技術指導を二義的にとの願いと方向を同じくする。

(1) 鑑賞

静かにきいて、ことばでうまく表現するだけのとりすました鑑賞にならないように、子どもの多様な感じとりや迷惑にならぬ程度の体の動きなど“反応”をたいせつにするよう心がけた。

曲は4年生の鑑賞教材を主とし、山松氏のいう効果ある曲のうち、モルダウやフィンランディアなども加えた。

レコードを1回目は解説なしにきかせて、自由な反応をみる。これは先入観なく直接に音楽に対面させたかったためで、2回目は日を改め、学習のねらいにあうききどころや解説などを加えてからきかせた。1、2回の反応を平均したのが下記の表（3）である。

表（3） 鑑賞教材と反応

類 別	作 曲 者	曲 名	主要楽器	快反応を示した者	N	S	R
物語性のある曲	コダーイ	ウィーンの音楽時計	打楽器類	92%	-	-	+
レガートな曲	サンサーンス	白鳥	チェロ	87%	+	-	+
リズムカルな曲	シューベルト	軍隊行進曲	ピアノ	95%	-	+	+

快反応とは、おもしろい、たのしい、はねたい、おちつく、またききたい等々快感をもつものをプラス(+)とし、何とも感じない、つまらない、やかましいなどをマイナス(-)とみた。(無答は一応マイナス(-)へ入れた)

結果は1回目は感覚的な反応が多く、2回目は知的な答が出てくるが、子どもにより多少差がある。気分がよくなるという者が多く、集中してきく傾向がみえた。調子やリズム等変化のところでは、教師や隣席の子と顔を見合わせるという反応もみえる。

Nは、表情が乏しく反応も観察ではとらえにくい。

Rが軍隊行進曲(1回目の鑑賞)に示した反応は、リズムにあわせて足ぶみをはじめ、明るい表情できいているが[A]部のテーマが繰り返されると、とたんに「まああ。」(またかの意)とどなる。曲の聴取後の感想発表では「同じふしばかり出てきてね、いらいらしちゃう。」と述べている。

[B]部の短調に転調するところへくると、ピクリと眉を上げて目が生き生きする。Rの気持ちを“変化を求めている”“同じことの繰り返しに飽きている”などと感じとることができる。

したがって、たのしい、勇ましいなどのうけとり方が多い中で「繰り返しが多くてR君はそう感じたのね。」と認めてやる。Sは“ウィーンの音楽時計”をきき、時計の鳴り出すところで、他児と同じ興味ある表情を示しながら、他児の「ああ出て来た」「鳴ったわ」などのささやきに対して「ヤァだ。」「うるっせ。」などとSのつぶやく。ここでは(一)反応と同時に同調をきらって主張するSを感じとる。第2回目聴取の時である。Sのつぶやきをとりあげて「なるほどS君はうるさく感じたの、同じ曲でもいろいろ受け取りかたがあるからね。」と認めてやると「うん。」とうなずき、この時間中落ちついていた。

流れてくる曲をきくという学習はネガティブであるが、子どもひとりひとりが感じている自分に気づくときでもある。その意味で教師もまた、音楽を媒介として子どもの内部のはだかのきもちとむかいあう。ここでは子どもは個にかえるから、クラス全体の一体感はないが、むしろ教師の方が、子どもの心によりそう場になった。

(2) 合奏

“所属感、一体感、そして友好関係”は個々の音楽を合わせる時に生ずるであろうという仮説のもとに合奏の試みを行なった。学校生活では多数の友好がほしいのはもちろんだが、経過や反応を注意深くみるために笛の二重奏を選んだ。曲は「夜汽車」で、編曲は追いかけて合うのと、同時に二部から出る「夕やけ雲」の二曲を使った。交友関係の改善が最終のねらいなのでソシオマトリックスから選択関係と排斥関係の児童を選び組み合わせて重奏させる。立て笛の技術的な差を条件からはずすため5人の排斥選択の中で順位をとらず、笛の技術が同程度の者をとる。一回目は被実験者以外の数人で合わせながら後、選択同志、排斥同志で合奏する。教師は合図などいっさいしないで傍観(観察)者となる。

・Rと選択関係のKが合奏した場合どちらかというRがイニシアティブをとる感じで順調にはじまり中間終止でふたりともおぼし過ぎ、まちがいが再出発して曲が終わると笑顔で見交わす。

・Rと排斥関係のHでは出だしがそろわない。Rは傍のKに合図を頼み順調だが最後が短かく終わる。

・教師ときき役の子が拍子してRとHが人の合図なしでやる。2度そろわず笑った後Hが働きかける形

でRが合わせてうまく出る。最後までよく合っている。

- ・3回目はふたりともうまくそい、最初の回に比べふたりとも表情がやわらかい。
- ・裏付けのため普通児のEとTでもやってみたが出発のとき働きかけるのが終始積極的なEであった事以外はRとHの場合と大体同じであった。
- ・参考に9月のソシオグラムではRの選択はK他4と変わらないがRの排斥からHと他の1人が抜けている。

結果を考察すると、曲の出はじめを合わせることは仲良しの間では、気心が合うという感じでスムーズだが、一方または双方の排斥関係では、ここに相当の努力を費やす。しかし、周囲のはげましと美しくつくる目的を与えて意図的にこの場をつくってやることは有意義である。編曲は追いかけ式に出るものより、同時に出るものの方が困難度（合わせる努力の大きさ）が高い。

SとNは他児とのひらきが大きいので同程度の奏者がいなかった。ごく容易なパートを与えて今後の結果をみていきたい。

きれいな相手と曲を合わせようという努力が、何度か失敗しても挫折とならず、さらに努力するところは、教師によるはげましによるほかに、児童自身の美しくつくりたいという成功の期待にもえて、生み出そうとする喜びが動機となっていると考えられる。

被実験者のRとHについて気持ちを問うことはしないでよくできたと成功を喜ぶ形で実験を終わったが、裏付けをやったFの自由日記にたまたま次の記述を見つけた。

「7月5日 5時間目に笛のテストをしました。わたしはT君とやった。先生が“ふたりともよい音に合わさったね。”とほめてくれました。いつもけんかをしているT君なのにどうしてよく気が合ったのかふしぎです。うれしいと思います。」

Ⅲ むすび

1 変わる力を信じる

4月から1か月続いた私の低迷は、今反省すると原因を究明し現状と結びつけて治療を考えようというこだわりが因があったと思う。子どもが「先生S君て泥棒よ、3年の時……」と旧悪をよく告げ口に来た。「あれはほんとうのS君じゃないのよ。泥棒なんて言わないでね。」と常識的にたしなめながら、どうしてだっただろう、家庭からかなどとすぐ原因と結びつけようとする・子どもの脱線ぶりにも「どうしてそんなことしたの。」というようなへたな接し方をし、そのために行きつ戻りつで訓練することが押しつけになることの焦りであった。脱け出られたのは理科でもんしろちょうの飼育が始まりあお虫やあげはの幼虫が脱皮し成虫になって子どもを感動させた。小さい虫の変態のすばらしさは、私にも生きて動いて変わる生命力を再発見させた。「子どもだって変わる、脱皮する。」がヒントになった。大賀一夫著「学校における心理療法」（P13～P18）の診断中心より治療中心への項、さらに治療は成長の過程であるの項を読み一層力づけられた。“新しい経験をさせれば性格も変化するはずである。自己洞察が進行し自己改善の意欲がふるい立つような新しい経験をさせることが治療といい得る”との

アレンのことばに、低迷期間の“どうして”にこだわる自分と、勉強したカウンセリングが形だけで生きていない。行為の制限ばかりやる訓練は解放と矛盾するという焦りと自信のなさによるものだ気付いた。

“子どもの変わる力の方へ目を向けよう”そう考えてから、子どもへのことばも変わった。失敗には、責めないで「どうしたらよかったかね。」「このつぎのときはどのようにしようか。」とか「今一番よい方法は何だろう。」というような指示で子どもから出たものを取りあげて訓練する形にした。原因にこだわらなくなって子どもも周囲も傷つかずに私自身も矛盾を感じないで解放や訓練の方策を実行できたことは大きな喜びであった。

2 その後の子ども

全く別とはいえない、小さい問題はまだときとしてあるが、普通の学級と生活上はあまり変わらない。ソシオメトリックス(9月)ではCRS総計が+10となりわずかずつ親和傾向に向かっていくことがわかる。少数だが、男女間の選択が出てきた。周辺児3は入れかわっただけだが孤立はNだけとなりNの排斥は11と半分以下になった。Nの身体的好調(発作0、欠席なし。)とともに子ども同志の間にも意識の変化がみられる。Rはまだけんかはするが興奮はみられず、飼育係や油ぬり作業を買って出る。Sは時々荒れるが正直になった。席に着く。鼓笛隊で活躍した。しかし、今後の見守りが必要である。

日記から子どもの意識をのぞいてみる。

・N君がぞうきんでふいているところにSさんYさんがゴミをおいたり机をふいたりしてじゃまをしていました。おとといもそうだった。わたしは思いきって注意してやりました。(7/15 K子)

・場所かえをした。ほくは…(中略)…先生が「N君と並んで。」というので(なあんだN君も残っていたか)と思ったがOKしました。N君はうれしそうに勉強していました。時々えんぴつをいじったりしていたずらしていました。ほくが注意してやったらわらっていました。(9/14 N男)

・席がかわった、わたしはJ子さんと……K君といっしょだ。K君はわたしたち(女の子)に「仲よくしよう。」と言ってくれた。もとはこんなことは1度もなかった。うれしかった。(9/14 T子)

・きょうの朝がんばろうと思ってきたけど先生が出張でいないのでやる気がなくなった。でも自習はちゃんとやった。わたしたちのはんは、このごろよく勉強ができます。わからない時H君やY君が事典を見せてくれます。だけどS君はまだ先生がいない日はいばっています。(10/1 M子)

・学級会で「1学期よりもっとがんばるには」をきめた。協力しあう、きまりを守る、意見をもっと出す。ほう力をなくす、いたずらしな、そうじをまじめに…(略)…。」先生は守れることをきめなさいとおっしゃったが、こんなにみんな守れるだろうか。(9/18 I子)

・やっぱりきまったことを守っていない人がいる。わたしも考えたら守っていないのがあった。努力すればできるかもしれない。りこうぶってその場だけでやっているのはいつまでも続かないと思う。みんなが気がるにいいと思うことをやっているとよいクラスになると思う。(9/20 I子)

引用及参考文献

- ・山松質文：音楽による心理療法 岩崎学術出版社
- ・田中熊次郎：ソシオメトリーの理論と方法 明治図書
- ・大賀一夫編：学校における心理療法 明治図書
- ・辻岡美延：新性格検査法 竹井機器工業株式会社